町民文芸

只見短歌会　令和三年十二月詠草

かたくなに老い行く我と思ふ日日淋しき歌のみ浮かびて来るも　馬場　八智

身内より新米旨く太りそうと電話に礼の声弾みけり　目黒　富子

車窓より眺む塩沢の川の面に白鳥群れゐて心安らぐ　関谷登美子

金木犀荷造りすればその香り店に広がり心やはらぐ　新国由紀子

このスカーフ私染めしと持ちくれし笑顔の友の形見となりぬ　渡部ヨリ子

見に行けぬ我にと孫嫁保育所の運動会のビデオを流す　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十二月定例会

日高俊平太　指導

青空に鋏差し出す松手入れ　都

追いかけて我も負けじと紅葉祭　一恵

しぐるるや山裾長き只見川　礼

手渡され野菜の凍てを抱きけり　真理子

冬に入るすっぽり靄につつまれて　紺青

雪晴れの景色まばゆき朝餉かな　一穂

上流にダム二つ置く神の留守　妙子

初雪に我が薔薇囲う夫ありて　修一

栗毛髪生え揃えきて鏡餅　恒夫

大欅に集う色鳥縁ありて　信

一週間ときめて水やるシクラメン

白鳥のV字描きて塒へと

夕陽浴び銀杏散るなり赤鳥居

介護より帰りし車窓の冬景色

剥きやすき里芋選び宅急便

柊の赤い実みごとな冬の庭

思い出を畳みながらの冬支度

ともかくも八十八や去年今年

厳冬や猫のごとくに温もりぬ

聞き取れぬマスクの会話外は雪

○日高（ひだか）　俊平太（しゅんぺいた）　先生

俳句会「航」の副主宰。鹿児島県出身。多くの句集を出版されるとともに、「俳句表現の不思議」（文芸社）などの著書もあり、俳句の普及に努めておられます。